

Title	経済価値の概念：価値論序説
Sub Title	Conception of economic value
Author	千種, 義人
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.10 (1948. 10) ,p.573(19)- 583(29)
JaLC DOI	10.14991/001.19481001-0019
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19481001-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (註七) 「資本論」第一版、一三五頁。譯、一六四頁。
- (註八) 三枝博音氏著「資本論の辯證法」、八九頁の註四七。
- (註九) 「資本論」、一五頁。譯、二〇二頁。
- (註一〇) 區別における差別、對立、矛盾の諸段階については、「大論理學」第二卷第一篇第二章參照。その簡單なる解説と價值論への適用は「商品の二要因の對立について」(拙著「價值論争史」所收)參照。
- (註一一) 「反デューリング論」、M. E. 全集、第二二卷、二九九頁。
- (註一二) 「資本論」、第一版、三〇頁、譯、五三頁。
- (註一三) 同、一五—六頁。譯、二〇〇—二頁。第一版、一〇七—一一頁。譯、一三七—四二頁參照。
- (註一四) 「資本論」カウツキー版、一六頁。この句はカウツキーの附加語。
- (註一五) 同、一四頁。譯、一九八頁。第一版、一〇五頁、譯、一三五頁參照。
- (註一六) 同、アドラツキー版、八四八頁。
- (註一七) 同、四五頁、譯、一八四頁。
- (註一八) 「大論理學」、グロツクナー版全集第四卷、一三六—一七頁。鈴木權三郎氏譯、上卷、一七六頁。
- (註一九) 武市健人氏著「ヘーゲル論理學の世界」上卷、三三頁以下。
- (註二〇) 「大論理學」、一三二—一三頁。譯、一七〇頁。
- (註二一) 同、一三三—一四頁。譯、一七一頁。
- (註二二) 「資本論」、第一版、一〇九頁。譯、一三九—四〇頁。
- (註二三) 武市氏、前掲書、三三四頁。
- (註二四) 「大論理學」、一三四頁。譯、一七二—一三頁。
- (註二五) 同、一三五頁。譯、一七三—一四頁。
- (註二六) 同、一三六頁。譯、一七五頁。
- (註二七) 同、一三五頁。譯、一七三頁。
- (註二八) 同、一三六頁。譯、一七五頁。
- (註二九) 同、一三五頁。譯、一七四頁。
- (註三〇) 同、五一六—七頁。譯、中卷、六四—五頁。
- (註三一) 同、一三六頁。譯、一七六頁。
- (註三二) 同、一三九頁。譯、一八〇頁。
- (註三三) 拙著「價值と價格」第二章參照。

—一九四八・一〇・一八—

論 說

經濟的價值の概念

— 價 值 論 序 說 —

千 種 義 人

一 價值概念の發展

經濟學の中心課題が經濟的價值の究明であることをいふまでもない。然し經濟的價值とは何であらうか。われわれはこの言葉を如何なる意味に用ひるべきなのであらうか。もしこの言葉に種々の異つた内容を與へることが可能であるとすれば、それぞれの内容に應じてそれぞれ別個の價值論が成立し得ることにならう。事實これまで經濟的價值は種々の意味に定義され、各々の定義に相應する各種の價值論が展開されて來たのである。その結果、價值概念は全く混亂し、價值論は相對立し、遂には價值論無用説までも現はれるに至つた。今日各種の經濟學が存在する理由も價值概念のこのような差に求められるであらう。そこでわれわれにとつて何よりも必要なことは、經濟的價值を如何に定義すべきかといふことである。この定義に應じて經濟的價值論の體系は自ら決せられるであらう。

先づ順序として價值概念の發展をたどり、それら諸概念が至當かどうかを吟味することから始めねばならない。價值概念の混亂とそれをめぐる諸論争の根源は、アダム・スミスの價值概念の曖昧さから出發する。スミスによれば、價值いふと言葉には二つの意味がある。即ち或時はある特定物の效用を表はし、或時は他の貨物を購買する力を表はす。前者を使用價值、後者を交換價值と呼ぶ。ところが最大の使用價值を有つものでも、往々にして交換價值を殆んど又は全く持たないものがある。これに反し、最大の交換價值を持つものでも、往々にして使用價值を持たないものがある。水ほど大切なものはないけれども、これを以つて何物をも買ふことはできない。然るにダイ

經濟的價值の概念

一九 (五七三)

ヤモンドは、殆んど何らの使用價値を持たないけれども、それと交換に他の貨物の大量を獲得することができる。この價値概念からは次のことが明瞭でない。

第一に、使用價値と效用とは同じものであるか。效用大ならば、使用價値もまた大きいといふことができるかどうか。その場合の效用とは如何なる意味のものであるか。両者は二元的に分けられ得るものか。及び両者が一致しないのは何故であるか。

第二に使用價値と交換價値とは何らの關係もないものであるか。兩者は二元的に分けられ得るものか。及び兩者が一致しないのは何故であるか。

スミスはこれらの點を明らかにすることなしに、直ちに交換價値を規定する原則を究明しようとする。そして資本の蓄積及び土地の私有に先立つ原始的社會狀態においては、交換價値は勞働によつて決定され、資本の蓄積及び土地私有以後の社會狀態では、賃銀、利潤及び地代の三つが交換價値の源泉であるといふ結論に達した。然しこの交換價値の理論にも曖昧な諸點が残されてゐた。

第一に、交換價値は勞働によつて決定されるといふが、その勞働は投下勞働であるか、支配勞働であるか。

第二に、質を異にした各種勞働を如何にして共通尺度に還元するか。

第三に、資本主義經濟において、價値は賃銀、利潤及び地代の三つによつて構成されるものであるか、それとも價値は勞働によつてつくりられ、そのつくりられた價値がこれら三つに分解するものであるか。

スミスに續いて價値概念を發展させたのはリカードであるが、彼もまたスミスに從つて價値を使用價値と交換價値とに區別し、使用價値を對象外におき、直ちに交換價値を問題にする。リカードが明瞭にした點は、
第一に、使用價値、即ち效用が交換價値に缺くことのできないものであることを認めたこと。
第二に、勞働によつて交換價値が決定される商品の外に、稀少性によつて決定される商品があることを明らかにしたこと。
第三に、交換價値の尺度を投下勞働に求めたこと。

第四に、直接勞働の外に、間接勞働を新たに價値決定要因として擧げたことである。

かくしてリカードは、スミスの價値説を純粹勞働價値説に純化することによつて價値概念を明確にしたのであるが、なほ使用價値と效用との關係、使用價値と交換價値との關係、異質勞働比較の問題については、スミスから殆んど前進することができなかつた。更に彼は純粹勞働價値説をあくまでも維持することができず、後になつて若干の修正を加へねばならなくなつた。リカード以後、この修正を眞に價値論の修正であると解するか、それとも修正の必要はなかつたと解するかによつて、價値論は二つの方向へ分れて行つた。リカードの修正は、生産費説への修正を意味するものであり、價値を矛盾なく説明し得るためには、そのように修正しなければならなかつたと考へるのが、シニオプ (N. W. Senior)、『ベーリー (S. Bailey)』、『ヘス・ミル (J. S. Mill)』である。ミルは、生産費説を採用することによつて、價値の理論は完璧であり、價値の法則について現在及び將來の學者の究明すべき餘地は少しも残つてゐないままで、極言した。このように價値は生産費によつて決定されると考へるのは、價値を財と財との關係に求めるからである。即ち價値は相對的なもので、その相對關係は交換價値によつて表示されると考へるのである。このような相對價値概念を採る限り、價値が勞働のみによつて決定されるといふ純粹勞働價値説は如何にしても支持され得ない。何となれば現實の交換價値、即ち價格は、投下勞働量以外に、利潤及び地代をも含むことは餘りにも明瞭であるからである。然し價値をこのように相對的に解したとしても、生産費説は決して完璧なものではない。何となれば生産費の大小をそれ自體が諸財及び諸用役の交換價値又は價格に依存するからである。かくして、後述するように、相對價値論は生産費説から均衡論へと發展して行くべき運命におかれてゐた。

リカードの修正を修正ではないと主張したのは、ジェームス・ミル (James Mill) 及びマカロック (J. R. McCulloch) であり、リカード價値論を修正の要なきまでに純化させたのはマルクスである。元來、リカードの交換價値概念には、價値は財と財との關係であるといふ相對價値の概念と、價値はこの相對價値の根本に存在し、これを左右するところの何らか絶對的なものであるといふ絶對價値の概念との二つが混在してゐた。價値概念を相對的に

把握したのが、前述の生産費説の主張者であり、それを絶對的に理解し、絶對價値の追求に進んだのがマルクスである。マルクスにとつては、相對價値は價値ではなく、それは價値の表現形態に過ぎない。價値とは相對價値の奥に存在するものであつて、それは抽象的な人間労働なのである。人間労働こそ價値形成の實質であり、この絶對的な價値の表現形態が相對價値であり、價格なのである。このように價値を抽象的な人間労働に絶對化することによつて、リカード價値論を覆つてゐたヴェールを一氣に取り拂ひ、すつぎりとした労働價値説を樹立することができたのである。即ちマルクスは、價値を決定するものは、投下労働量であるか、それとも支配労働量であるかについて、異質労働を如何にして共通尺度に還元するかについて、及び價値は賃銀、利潤、地代によつて構成されるのか(即ち生産費説が正しいのか)、或は労働によつて作られた價値がこれら三部分に分解するかについて、明確に答へることができたのである。かくして労働價値説はマルクスに至つて初めて論理的に首尾一貫した體系を持つことになつたのである。然し、第一に、價値の本質を抽象的な人間労働に求めることは正しいかどうか。何故にそれは效用であつてはいけぬのか。又相對價値であつてはならないのか。これについて反マルクス主義者を首肯せしめ得るような説明は得られない。第二に、使用價値と效用との區別が意識されてゐない。第三に、使用價値は交換價値の基礎であることは認めるけれども、二つの價値の大きさの間に如何なる關係があるかについて考慮されてゐない。

これらの三點を明らかにすることは、マルクスの立場からは無用のことかもしれないが相對價値を眞の價値であると解する者にとつては、これらに對する満足な答へが必要なのである。然し相對價値論が生産費説にとどまる限り、それは論理的一貫性を持つことができず、しかも生産費説はマルクス説と同様にこれらの三點に答へることができない。こゝにおいて相對價値論の立場から何らかの新たな展開が期待された。これに應じて立ち上つたのが主觀的價値論者である。その代表者としてカール・メンガー (C. Menger) をあげることができよう。彼は、使用價値と交換價値を二元的に區別することなく、兩者を一元的に把握しようとして、主觀的價値概念に到達する。價値をこのように主

觀的に把握することによつて、從來何人によつても解決されなかつた、使用價値と效用との區別、並びに使用價値と交換價値との關係が初めて明らかにされたのである。然し價値概念を主觀的意味に限ることは許され得るであらうか。これまで價値といふ言葉は主觀的意味ではなく、客觀的意味に用ひられて來たものではなからうか。もし價値が主觀的なものであるならば客觀的價値は存在し得ないのではなからうか。このような疑問に答へて、主觀的價値の外に客觀的價値の存在を認め、しかも客觀的價値を主觀的價値から説明しようとしたのがポエム・バヴェルク (Pöhlh-Ba-berk) である。このように價値を主觀的價値と客觀的價値とに區別することは、價値概念の混亂を解消する上に重要な貢献をなしたものと云へよう。後述するように、價値論の體系は、價値をこの二つに區別することから始めなければならぬ。

主觀的價値論は、價値の根源を欲望満足に見出すのであるから、絶對的價値論の一種であると考へられ易い。事實そのように考へる人もないではない。然し人間の欲望自體が相對的なものであるから、欲望満足の大いさによつて決定される主觀的價値の大いさもまた相對的なものでなければならぬ。従つて主觀的價値論は相對的價値論であると解する方が至當であらう。

ところで經濟的價値論の中心課題は客觀的價値の成立と變動を説明することにある。主觀的價値論はこのような課題によく堪へ得るであらうか。これに堪へ得ないことは明らかである。何となれば主觀的價値は客觀的價値の大いさに影響するけれども、それを決定する唯一の要因ではないからである。主觀的價値と並んで生産費の大いさ、技術の狀態等も同様に客觀的價値の構成要因である。のみならず主觀的價値は逆に客觀的價値によつて影響される。このような事實を認める限り、主觀的價値論は、相對的價値論の立場からしても充分なものではない。然らばこのような缺點を如何にすれば克服できるであらうか。その唯一可能な方法は相對價値を均衡論的に説明することである。このような方向へ價値論を導いたのはマイシヤルである。

マイシヤルは價値といふ言葉を使用價値の意味に用ふるのは當を得ないとして、價値概念を交換價値に限定し、

財の價値はその財に對する需要供給の關係によつて決定されると説く。彼にあつては、かくして決定された交換價値、即ち價格が價値なのであつて、その價値の奥に何らかの絶對的價値があるのではない。

然し一財の價値は單にその財に對する需要供給によつて決せられるのではない。あらゆる財の價値は相互依存關係を保ちつゝ、同時に決定される。この點に着目して、あらゆる財の價値を一般均衡において説明しようとしたのが一般均衡論である。ワルラス (L. Walras) ベノーター (V. Pareto) 及びカッセル (G. Cassel) 等がそれである。一般均衡論においても、相對價値、即ち價格が價値そのものである。價値は價格に表示されただけの大いさを有するものである。人はよく一般均衡論においては價値論がないといふ。然し一般均衡論では價格論が即價値論であつて、それ以外に價値論があり得よう筈がない。價格の奥に勞働及び效用等が存在することを認めないのではない。然し勞働又は效用は價値ではない。勞働及び效用は價値を構成する單なる一要因に過ぎない。一般均衡論においては、人がA財よりもB財を選ぶといふこと、或はA財とB財との最も有利な組合を選択するといふ事實が分れば、それで足りるのであつて、人は何故にA財よりもB財を選ぶかを知る必要はない。この意味で勞働價値説や效用價値説は無用である。價値論を無用となす説は種々の誤解を生んでゐるけれども、それは相對價値論、即ち價格論こそ眞の價値論であつて、それ以外の價値論は經濟學の領域内ではないことを強調したものである。

このように相對的價値を價値であると解する限り、價値論は、論理的には、一般均衡論にまで發展すべきものである。生産費説も效用價値説も部分均衡論も共に不完全である。

かくしてわれわれは、論理的に貫した客觀的價値論としては、勞働價値説と一般均衡論とをあげ得るのみである。前者は價値を絶對的意味に、後者は相對的意味に理解し、各々それぞれの概念に相應した完全なる體系を備へてゐるのである。従つてわれわれにとつては、單に絶對的價値論か相對的價値論か、換言すれば勞働價値説が一般均衡論かの選擇が問題として殘される。

二 個人的價値と社會的價値

今日まで價値論が紛糾を重ねた理由は、前述したような價値概念の混亂にある。人々は主觀的價値概念を持しつゝ、客觀的價値論を批判したり、或はその逆をなしたり、更に絶對價値概念を採りつゝ、相對價値論を否定したり、或はその逆をなすといふ、過ちを犯して來たのである。かくては價値論が紛糾するのは當然である。従つてわれわれは先づもつて價値概念を明らかにすることから始めねばならない。

私は價値論に關する混亂を避けるためには、價値を個人的價値と社會的價値とに區別すべきであると考へる。個人的價値とは、一財に對して個人が認める價値、即ち一財の個人に對する重要性である。社會的價値とは、一財に對して社會が認める價値即ち一財の社會に對する重要性である。この二つの價値は相互に密接な關係を有する。即ち社會における各個人の認める個人的價値が相集つて社會的價値を形成し、かくて形成せられた社會的價値は今度は逆に各人の個人的價値に作用する。然し二つの價値は同じものではない。共に何らかの「重要性」の大いさを示すものではない。一方は各個人に對する重要性を示し、他方は社會に對する重要性を示す。一財が各人に對する重要性は人によつてそれぞれ異なるであらう。従つて一財の個人的價値は種々の大いさをもち得る。然し社會に對する一財の重要性は、その社會において客觀的な一つの大きさとして存在する。もちろん或個人の個人的價値は社會的價値に等しいことがあり得る。然しそれは特殊の個人にだけいへること、大部分の個人にとつてはさうではない。従つて個人的價値と社會的價値は原理上區別されるべきものである。もしこれらを區別しないで、兩者を包括して共に價値と呼ぶならば、價値概念の混亂を惹起すことは、必然である。

價値概念を個人的なもの、社會的なものに區別し、それぞれ別個の價値理論を構成する必要を説いたのは前述したように、ボエーム・パヴェルクである。彼は價値を主觀的價値と客觀的價値とに區別し先づ主觀的價値を次のように定義する。「主觀的意味における價値とは、主體の幸福目的に對する一財又は一複合財の重要性 (Bedeutung) である。この意義において、ある財が私にとつて價値を有するといふ時には「私の幸福がその財とある種の關係を有し、従つてそれを所有することによつて、それが無ければ與へられず、ないしは我慢しなければならぬ」等の欲望充足、

享樂、快樂等が與へられるか、或は苦痛が除かれるかを認めるのである。この場合、その財の存在は私にとつて人生の幸福の利得を意味し、その喪失は人生の幸福の除去を意味し、従つてそれは私にとつて重要であり、價値を有するのである」と。(註1) 私のいふ個人的價値とは正にかくの如きものである。

ボエームは續いて客觀的價値を定義して大要次のようにいふ。「客觀的意味における價値とは、何らかの客觀的効果を齎すための財の力、もしくは能力である。この意味においては、人間が得ようとする外部的效果と同數の、多種の價値が存在する。即ち食物の榮養價値、材木や石炭の加熱價値、種々の肥料劑の肥料價値、爆發材の爆發價値、等々はこれである。」これらの價値は、通例、「成分」とか「力」とかいふ言葉で表現され得るものであつて、ある主體の不幸とは關係なく純粹客觀的に存在する。然し今例示した種類の客觀的價値は純技術的なものであつて、經濟的なものではない。従つてそれらは經濟學とは直接の關係がない。然し客觀的價値の中には、經濟學にとつて極めて重要なものが存在する。即ちそれは財の客觀的交換價値である。「財の客觀的交換價値とは、交換における財の客觀的效力、換言すれば、交換の際に他の經濟財の一定量をその代りに獲得し得る可能性である」。例へばある馬の代りに一萬圓獲得することができるならば、その馬は一萬圓の價値があるといふのである。このような價値は、ある主體の幸福にその財が及ぼす影響を表はすのではなく、單にその財が他の財の一定量と交換される場合の客觀的關係を示すに過ぎない。それは「購買力」といふ言葉で置き替へ得るものであると(註2)。私がこゝで社會的價値といふのは、交換經濟においては、ボエームのいふ客觀的交換價値を意味する。何となれば社會に對する一財の重要性は、後述するように、結局、その財の客觀的交換價値の大小によつて測定されるからである。然し社會的價値の概念は、交換の行はれない共同經濟、例へば社會主義經濟においても適用される。その場合、社會的價値とは、その社會の統一的意思が一財に對して認める重要性である。このような價値もまたある個人の幸、不幸とは關係なく客觀的に存在する。

價値の本質を效用とか抽象的人間労働とかに求めないで、個人又は社會に對する「重要性」として定義する利益はどこにあるであらうか。それは經濟上の價値概念を文化的價値一般と關係せしめ得るところにある。文化上の價値とは、われわれが或ことに對して認める何らかの意義なのである。われわれは常に何らかの價値を求めて行動する。單に經濟的價値のみを追求するのではない。同時に倫理的、宗教的、學問的、その他の文化價値を得ようとする。もしある行為によつて經濟的には大なる價値を獲得することができても、それによつて他の文化價値をより多く失ふならば、われわれは取えてこのような行為をしようとは思はないであらう。同様に他の文化價値を獲得し得ても、それによつてより大なる經濟的價値を失ふならば、そのような行為を躊躇するであらう。個人並に國家は各種の價値を比較考慮して、より多くの利益が得られると思はれるような行為又は政策を行ふものである。もちろん各種の價値を測定比較すべき共通の尺度は實際的には見出し得ない。然しわれわれは直觀的にこのような比較をしてゐる。もしこれが不可能であるならば、われわれは如何なる行為も意識的には營みないわけである。このように經濟的價値は、人間が得ようと努力する價値の一種類なのであるから、その價値を他の價値と比較し得る基盤におかねばならない。このような基盤は、經濟的價値をも、「重要性」といふ言葉で定義することによつて初めて得られる。效用とか労働とかによる定義を以つては、他の價値と比較すべき基盤が失れる。效用のあるもの、労働の投下されたものに價値があるのは、それらのものが人間に對して何らかの重要性を有するからなのである。かくして價値を、個人の行為基準又は國家の政策基準を示す言葉として用ひようとする限り、「重要性」といふ表現を使用せざるを得ない。

さて經濟的價値には、個人的價値と社會的價値とがあるけれども、その中、經濟學の中心課題をなすものは社會的價値の究明であることはいふまでもない。何となれば經濟學は社會に存在する經濟的秩序を明らかにしようとするものであるからである。然しこのことは個人的價値決定の研究を無用ならしめるものではない。何となれば個人的價値は、人間經濟行為の根本動機を規定するものであり、従つてそれは社會的價値の形成に無關係ではあり得ないからである。シュムペーター(J. Schumpeter)やディッツェル(H. Dietzel)は、個人的價値論は心理學や生理學の領域に屬するものであつて、經濟學とは無關係であると考へる。確かに人間の欲望そのものに關する研究は經濟學の固有の領域ではない。人間には何故に欲望があり、又如何なる欲望があり、それら欲望は何故に満たされるにつれて遞減

するかといふ問題は、經濟學の直接の對象ではない。經濟學は人間の欲望の種類及び大いさが心理的に與へられたと假定して、その上で理論を樹立するのである。然しながら一財に對する欲望が時に大なる個人的價値を生み、時に小なる個人的價値を生むのは何故かを明らかにすることは、經濟學にとつてのみ必要であり、最早、それは心理學上の問題ではない。かりに一步譲つてかゝる研究が經濟學の領域ではないとしても、それは經濟學に最も關係の深い科學の領域である。現在、經濟學以外の科學において、この問題を研究してゐるものは全然ない。それ故に經濟學自らの解決に進まねばならないのである。カッセルのように、個人的價値論は社會的價値論、即ち價格構成論にとつて無用であると考へる學者もある。然し前述したように、個人的價値を求める個人人の行動が價格構成に何らの影響をも及ぼさないといふことは、如何にしてもいへないであらう。その他、個人的價値論、例へば限界效用理論は自明の理を述べてゐるに過ぎないといふ者もある。限界效用理論が唱へられた後においては、人々は往々にしてこのように考へがちである。然しこの理論が発見される前に、人々は、スミスによつて提出された水とダイヤモンドの矛盾の解決に如何に困惑したかを知るならば、これを單なる自明の理として經濟學から排除することは至當ではなからう(註3)。

古典學派の「使用價値」の概念は、嚴密には個人的價値を示すものではないが、ほどこれに相應する言葉である。リカードは、使用價値がなければ交換價値もまた成立し得ないことを認めつゝも、使用價値について研究しようとしなかつた。その理由は、使用價値は交換價値の尺度とはならないからである。確かにさうである。然したとへ尺度とはなり得ないにしても、使用價値の大小が交換價値の大小を決定する一要因であることを否定することはできない。従つてわれわれは使用價値の研究を經濟學から排除すべきではなからう。マルクスもまた使用價値を離れて商品(即ち交換價値を有するもの)の存在はあり得ないことを是認しつゝも、使用價値の研究を試みようとしなかつた。使用價値は如何なる社會關係においても存在するものであつて、資本主義經濟に特有なものではないといふがその理由であつた。資本主義經濟の特質は商品生産である。商品とは賣らんがために生産されるものであつて、交換價値を有する。この交換價値が經濟學の對象であると考へるのである。確かにその通りである。然し使用價値はあらゆる社會關係

においても見られる現象であるといふことは、資本主義經濟を對象とする經濟學からこの研究を除外すべき理由にはならない。何となれば資本主義經濟もまた使用價値現象を含んでゐるからである。これを含んでゐる以上、この研究を無用とすることは許されない。もしこれまでの經濟學又は他の科學によつて使用價値の研究が餘すところなく行はれてゐるならば、われわれは今日このような研究を自ら行ふことなしに、經濟現象を説明できるかも知れない。然しマルクス經濟學が誕生するまでに、使用價値研究が充分になされてゐたとはいへない。かりに現在かゝる研究が完遂されてゐるとしても、このことは使用價値論が經濟學ではないといふことを意味しない。使用價値法則を知ることによつて社會的經濟法則をよりよく理解することができるならば、その研究は經濟學においてなさねばならないことである。もとより使用價値は經濟學の主要對象ではない。その研究は、交換價値をよりよく理解するために必要なのである。前述したようにかゝる研究を經濟學以外の補助科學が行つてもよいのである。あたかも數學や物理學の研究のように。經濟學が自らこの研究を行はざるを得ないのは、經濟學に代つてかゝる研究をなす科學がないからである。更に又、使用價値は如何なる社會においても、見られる現象であるにしても、それが現はれる仕方及び形態は、それぞれ社會によつて異なるであらう。現代の社會における使用價値現象の特異性は、やはり現代の經濟學において究明さるべきものであらう。

かくしてわれわれは、研究の中心を社會的價値におきつゝも、個人的價値の研究を併せて行はなければならぬ。われわれが次にすべきことは、個人的價値及び社會的價値の本質をわれわれの經濟學體系の中で規定し、それぞれの理論を構成することである。その際、個人的價値については、大體、限界效用説の成果を援用することができるであらうし、社會的價値については、勞働價値説又は一般均衡論が適用されるであらう。勞働價値説をとるか、一般均衡論を選ぶかは、われわれの經濟學體系の性質に依存する。これらのことについては稿を改めて論ずる積りである。

(註1)長守善氏譯「ボエーム・パウエルク經濟的財價値の基礎理論」一五一六頁 (註2)同書一六一七頁

(註3)價値論無用説については、拙著「價格・貨幣・爲替の基礎理論」において詳論した。(未完)